『コミュニティ』141 号, 82-84, 2008.

「辞典」のない世界で生きるということ：パプアニューギニア調査の経験

梅崎昌裕

1990 年代に、パプアニューギニアの山岳地帯にあるタリ盆地で、人類生態学の調査をおこなった。住み込んだのは人口 150 ほどのウェナニ村である。そのころの私は、調査とはウェナニ村の在来知識と実践についての「辞典」をつくるようなものだと考えていた。イメージとしては、村の物知りや長老に話をききながら、ウェナニ村の生業の仕組み、食生活、有用植物の利用を調べる。そうしてウェナニ村の「辞典」を蓄積していけば、いつかはウェナニ村の人々の生態と文化を理解することができるだろうと考えていた。

そして実際に、私は「辞典」のようなものをつくっていった。最初にとりくんだのは家系図をつくることだった。「物知り」や「長老」に、『あなたのお父さんは何という名前ですか？』『お父さんのお父さんは何という名前ですか』『そのお父さんの名前も知っていますか』など、できるかぎり過去にさかのぼりながら聞き取りをすすめた。さらには、家系図に登場する個人の出生年、死亡年、婚姻年などの情報を書き込んで、大学ノート５冊分の家系図を完成させた。

次に、村の地図をつくった。巻き尺とコンパスで測量をしながら村の中を歩き回り、「物知り」にきいた地名を書き込み、畑には持ち主の名前、栽培されている作物の種類、面積などの情報を、家の場所にはそこに暮らす人の名前と年齢・性別を加えていった。地図はつくるにしたがって、どんどん拡大していくので、時々ノートから大きな紙へと書き写した。

これら二つの「辞典」が完成したことで、コミュニティのなかで誰と誰が親戚なのか、誰の畑がどこにあるのかを知ることができるようになり、調査は順調に進んだ。たとえば、二人の男性がひとつの畑で共同作業をしているのを目にして、単純に「メンゲイとウニャップマールは仲がいいのかな」と思うしかなかった私が、「ウニャップマールはメンゲイの娘が結婚した男性だから、二人は義理の親子関係にある。二人が働いているのはメンゲイの畑だから、ウニヤップマールは義理のお父さんを手伝っているわけだ」と洞察できるようになったのである。どちらがより深くコミュニティの理解につながるかは、いうまでもないだろう。

ところが、調査が進むにつれて、私の「辞典」づくりには、本質的な問題が内在していることが明らかになった。たとえば、家系図である。家系図の情報は、それぞれの家系に最も関係の深い「物知り」に尋ねるのを基本としていた。『あなたの父方のおじいさんの妹であるシシリーはどこに結婚していったのか？』という私の質問に、『シシリーは、タガリ河の下流にあるムニマ村に嫁いでいった』と確信に満ちた答えが返ってきたとする。当然、私はこの情報を家系図に載せる。ところが、その内容を、ムニマ村で確認すると、『シシリーがここに嫁いできたということはない。確かに、しばらく住んでいたことはあるらしいけど、あれは好きな男のところに押しかけてきただけだよ』と、全く別の答えが返ってくる。現地の言葉が上達するにつれてこのようなことが頻繁に発見されるようになり、私の家系図には、「備考」や「但し書き」が次々に追加されていった。

サツマイモのことを調べたとき、ある人が『生産性が低い』と説明する品種を別の人が

『生産性が高い』と説明する、というようなことがよくあった。「物知り」が『畑に植えるとサツマイモの肥料になる』と教えてくれたフビという樹木などは、私が確認した村人の 3 分の 1 が『畑に植えるとサツマイモの生産性が悪くなる』と答えた。私を混乱させたのは、全く違うことをいいながら、どの人の口調も確信に満ちていたことである。

当初、私は、「シシリー」が結婚したかどうかについては、誰にきいても同じ答えがきけると想定していたが、実際にはそうではなかった。あとで考えれば、「結婚」すると、男性側から女性側へと婚資を渡さなければならないので、私が質問した人が婚資を受け取る側であれば「結婚した」、婚資を払う側であれば「結婚していない」と答えたのかもしれない。また、私はサツマイモの品種が同じであればその生産性について村の誰もが似たような意見をもっていると思いこんでいたが、実際にはそうではなかった。人々の判断がその品種を栽培した個人的な体験に基づいている以上、これもまた当然のことかもしれない。ウェナニ村の知識と実践は、個人の人間関係あるいは経験と関連しながら、きわめて個別的に存在する傾向にあった。

反省しなければならなかったのは、私が自分の育った日本の常識――あらゆる分野に「辞典」のようなものがあり、そこには「正しい」ことが書いてある――にとらわれていたことである。結婚したかどうかは、婚姻届が役所で受理されたかどうかで判断し、サツマイモの品種特性は農業試験場の発表するレポートで知ることができる。ある種の樹木がサツマイモの肥料になるかどうかは、農学の分野で論文がだされているはずだ。このような私の常識は、ウェナニ村の知識と認識のありかたを理解するためには、必ずしも有効ではなかった。異文化を理解するということは、人々の知識と実践のなかみを知るだけでなく、その存在のありかたを知ることなのだ、というのが現在の結論である。